

# 未利用材活用に期待も

## 環境アセス開始 予定地を調査



建設予定地で事業者の説明を聞く県環境影響評価審査会の委員たち

八代市新港町の工業専用区域に、豊田通商の子会社エネ・ビジョン（名古屋市）による国内最大級の木質バイオマス発電所建設計画が浮上した。環境への影響を計画段階から予測し、十分な環境保全対策を講ずる環境影響評価（アセスメント）の手続きも始まり、6日、県の審査会（会長・村上泰浩崇城大工学部教授、15人）による建設予定地や周辺の現地調査が行われた。

同社によると、発電所の会を経て2019年着工、出力は約7万5千瓩。発電22年の営業運転開始を目指している。燃料は安定した供給が期待できる北米など諸外国から輸入した木質ペレットを中心に1日当たり約1200トを使用し、国産材は約

1割を見込む。八代市の県もつたいない」と、県産材の活用を期待する声が上がった。同社は、県内の山林で買手が付かず放置されている未利用材を燃料として活用する方針。審査会で社担当者「発電所を運用しながら、可能な限り県産材の割合を増やしていきたい」と話した。

（宮上良二）